奪い合いの世の中

I リュウ ウカン

人は生まれてからなにかを奪っている。母親から時間を奪う、父親から金を奪う、兄弟から親の愛を奪う。大きくなったら、進学や求職も他人と競争し、他人のチャンスを奪うのだ。それ以後の人生も奪うのみだ。そもそも、人生は奪うと奪われることでつくられたものだ。

人類は自然から資源を奪う。生物から命を奪う。人同士で名声や金や地位を奪い合う。そう、人は生きるため奪わないといけないのだ。強者は人から奪い、弱者は人に奪われる。こういう世界なのだ。

この奪わないと奪われる世の中、贈るという行為は存在しないか。いや、ある。無情な自然と違い、我々人間は感情を持っている。愛する人のため、人間は競争せず譲る。親から、家族から、愛された人たちから、私達は何もしなくてももらえる。こんな人たちがい

るから、私たちは無情な獣にならずに人間になれる。こんな人たちがいるおかげで、弱者が生きられ、世界は強者と弱者とともに暮らせる世界になる。

私たちも、だれかのために、なにかを譲れば、立派な大人と言える。口でどんな綺麗な言葉を話しても、行動しなければ意味もない。だから、今も、これからも、大切に思っている人の前で、奪うのでなく奪われる人として生きてもよいのではないだろうか。なぜなら、人はなにを奪うより、なにかを譲った方が幸せを感じられる不思議な生物だからだ。